



## わすれました

朝、学校の玄関で子どもと顔を合わせています。子どもの話を聞いて初めて知ることがあります。自宅から北門までお母さんと一緒に歩いてやってくる3年生は、お母さんに算数のテストがあることや登校中に会った上級生のことを話したと教えてくれました。5年生が、「おはようございます」と自分の精一杯の声を出し、ていねいなお辞儀をしてくれるので、彼と会うのが楽しみでした。先日、彼の考えを聞いてみると、「ぼくの元気を校長先生に届けようと思ってあいさつをしています」と話してくれました。親子の登校がとおきの時間になっていることや心を届けるあいさつはうれしいことですが、子どもが話す力を伸ばしたことが喜びです。

わたしは担任をしていた頃、子どもに話す力をつけることができませんでした。1年生を担当すると、授業の中で発言しようとするとき、「わすれました」と言うことがあります。教師に話したくて手を挙げるのですが、いざ話そうとするとことばが消えたかのように言えなくなります。1年生のかわいらしい場面ですが、これをほおっておくとかわいらしいでは済まなくなります。「わすれました」でその場を解決する子どもになります。1年2年とほおっておくと例によって、都合が悪いことがあると今起きた出来事でも「わすれました」と言い張る子どもになります。初めから出来事を思い出させる指導をして話せても、家に帰って話すように指示し、次の日に家の人は話を聞いてどう言われましたかと確認すると、話したけれど「わすれました」となりました。授業でも日常でも「わすれました」を見逃しておく、やがて大人に踏み込むすきを作らせないことばを操るようになります。

話す力をつけるお話スタンプは、子どもが親御さんに話すためのスタンプで、話を聞いた親御さんは確認のサインや返事を書くことにしています。学校では電話ですぐに知らせるほどではないけれど知ってほしいことがときにはあります。良い行いもあれば、頑張りなさいと指導したときにもお話スタンプを使います。ていねいに順序よく話す国語力の学習です。先日、6年生とのお別れ集会のあと、3年生全員にお話スタンプを押ししました。オンラインのじゃんけん大会があり、次々と先生が現れてじゃんけんを続け、勝ち続けた者がクラスに何人いたかを競うルールでした。3年生で勝ち続けた者はいませんでした。ゼロですからごまかしはあり得ません。宿題をやってなくてもやったとごまかせば心は墮落し、やっていないと話せるところから子どもは成長します。

都合の悪いことの、その先のごまかしは止めてやらなければなりません。友達とけんかをしたとか、テストの点数が悪かったとか、良くないことは起きるわけで、良くないことを良かったことにしてやります。子どもと話す時間をとり、どこでどんな考え違いをしたのか考えるようにします。考えたことをことばにして書くとか話すことをすれば、良くないことが良かったことになります。考えたことを書く授業や日記指導、そして話す活動は、「わすれました」を使わない、考える子どもにする学習です。